研究ノート

井上頼寿「八瀬祭を観るの記」と研究資料

——國學院大學図書館所蔵・井上氏旧蔵資料を用いて——

大東敬明

はじめに

本稿の目的は、民俗学者・井上頼寿（一九〇〇～一九七九）の研究姿勢を確認した上で、その研究資料と、著述である「八瀬祭を観るの記」[1]（『風俗研究』八六、九一）とを比較することにある。[2] 研究資料は、國學院大學図書館所蔵・井上氏旧蔵資料のうちに含まれる頼寿の研究ノート・手帳ほか（以下、「井上頼寿資料」と表記する。）を用いる。井上氏旧蔵資料については後述する。

上記の結論として、本稿では次の二点を指摘する。

①井上頼寿の研究姿勢は、事例の比較によって「本質」を示そうとするものである。

②「八瀬祭りを観るの記」は井上頼寿のノートのうち『京之山』四、六にもとづいて記された。

一、井上頼寿について

先行研究

井上頼寿についての年譜や著作目録などは見出せていない。

さらに、その先行研究も少ない。それは、頼寿自身が「事実を忠実に現はす」[3]「出来る限り理論を避け実証的にやりたい。材料その物を並べ挙げるのみによつて誰人にも首肯せしめ得たならば自分としては満足だ」[4]とするように、理論や思想を表には出さず、確認した事実を資料として列記するという研究姿勢をとったこととも関係する。このた

めに、祭祀や祭祀組織の姿は見えてくるが、頼寿自身の姿が見出しにくいのである。

一方で『京都民俗』に連載された「『古習志』その後」[5]のように、頼寿の紹介した事例と、その後の状況を報告したものもある。

頼寿についてまとめたものに

- 関谷龍子「井上頼寿」[6]（『日本民俗大辞典』）。
- 櫻井治男「井上頼寿―篤実な民俗採訪者―」[7]（『皇學館百二十周年記念誌―群像と回顧・展望―』）。
- 岩田英彬「井上頼寿先生のこと―歩く民俗学―」[8]（『近畿民俗』一七五・一七六）。
- 拙稿「國學院大學図書館所蔵「井上氏旧蔵資料」からみた井上頼寿」[9]（『京都民俗』二九）
- 櫻井治男「人物コラム⑥　井上頼寿」[10]（『三重県史　別編・民俗』）。

がある。いずれも短文である。このほか、頼寿についての回想を含むものとして中野卓編・著『中学生のみた昭和十年代』[11]がある。

櫻井は頼寿の『伊勢信仰と民俗』（神宮司庁、一九五五年）について、今日では消滅してしまった民俗事象や文献を記しており、参考となる点が多いとして評価する。その一方で、「聞取り内容と文献資料からの引用、自己の体験とが判別しにくい箇所もあり、またいつの調査内容であるかが記されておらず、活用にあたっては検証や注意が必要である」[12]ともする。この指摘は、頼寿の著作の多くにあてはまる。

井上頼寿資料の中には、調査での見聞をまとめたノート・メモ・手帳類が含まれている。今後、これらを整理・分析することによって、これら問題点は、ある程度、解消されるであろう。

頼寿は昭和前期の京都における文化史・民俗学の展開や神社関係者のネットワークの中でも活動している。その活動を、京都における民俗学の動きの中に位置づけたものとして

- 柴田實「京都府」[13]（『日本民俗学大系　一一　地方別調査研究』）

がある。[14]頼寿は大学には属さなかったが、京都帝国大学を中心とする民俗学や文化史の展開の中に位置づけることも重要である。

これらの先行研究において、その研究は、近畿地方を中心として丹念な民俗採訪を行い、事実を忠実に記す点が評価されている。また、櫻井は頼寿が民俗学に興味を持つ背景に、父・頼文の影響をみている。[15]

井上頼寿の生涯

先に挙げた先行研究にもとづいて辞典項目的に井上頼寿の生涯・業績を記す。

中学校教諭、民俗学者。明治三十三年に現在の三重県伊勢市に生まれ、同地で育つ。父は伊勢の神宮の禰宜、神宮皇學館・教授をつとめた井上頼文、祖父は国学者・井上頼囶である。

神宮皇學館を大正十二年（一九二三）に卒業し、岐阜県海津中学の教員となる。翌年に京都府立第二中学校の教員となって京都へ移住し、以後、昭和五十四年に没するまで京都を中心に活動した。昭和十七年からは同第一中学校へもつとめている。

そのかたわら、近畿地方を中心とする民俗などの調査を行った。その関心は多岐にわたる。特に祭祀、講、祭祀組織といった神道およびそれをめぐる習俗の事例収集や研究に業績を残した。のち、京都市教育委員会や京都府立総合資料館の嘱託などをつとめ、京都國學院においても教鞭をとった。

京都府立第二中学校に組織した拾遺会（京二中史学会）を除けば[16]、頼寿は自ら研究会を組織することはなかった。しかし、京都帝国大学の読史会・民俗学会、江馬務が主催した風俗研究会をはじめ、様々な研究会に出席し、調査・研究発表を行った。

著作として『京都民俗志[17]』（西濃印刷株式会社岐阜支店、一九三三年）、『京都古習志』（館友神職会、一九四〇年）、『同宮座と講』（地人書館、一九四三年）、『京の七不思議』（郷土文化研究会、一九四四年）、『洛南』（京阪神叢書一一、宝書房、一九四八年）、『日本の菓子』（推古書院、一九四九年）、『京菓子』（推古書院、一九五〇年）、『伊勢信仰と民俗』（神宮教養叢書二、神宮司庁、一九五五年）、『近江祭礼風土記』（滋賀県神社庁、一九六〇年）、『改訂　京都民俗志』（東洋文庫一二九、平凡社、一九六八年）、『続近江祭礼風土記（農耕儀礼）』（滋賀県神社庁、一九七三年）がある。このほか、近畿地方の民俗・祭祀・祭礼に関する論文がある。

晩年は滋賀県神社庁の依頼によって『近江祭礼風土記』の続編（『続近江祭礼風土記（農耕儀礼）』）の執筆に力を注いでいたが、昭和四十八年（一九七三）に脳血栓で倒れ、執筆中であった同書は、頼寿の原稿をもとに滋賀県神社庁関係者の手によってまとめられた。

頼文の影響

先述の通り、櫻井治男は、頼寿が民俗学を志す背景に父・頼文の影響をみている。

『京都民俗志』「後記」においては、

こんな拙い小著を編んでみた動機は、先考（頼文）の祭日を期して何か一寸したものを纏めて見たいと思つた。それに就いて直ちに思ひ浮んだのは、昭和四年頃に一寸輯めた京都の民俗上の手記で「民俗」ならば先考にも関係深く壮年の頃内務省で資料を集めた事があるし、小生も中学時代から多少志を持つてゐた。[18]

とし、頼文が民俗学に関わりが深く、頼寿自身も中学時代から民俗学に興味を持っていたことを述べる。また、頼文は、古典注釈などを行なうには机の上に留まってはいけないとの考えから、現在では、考古学、人類学、民俗学にあたるような調査も行っていた。特に宮座の研究も行なっていたことは、頼寿の研究とも接点がある。[19]

よって、櫻井が指摘するように、頼寿が民俗学、祭祀、祭祀組織を志すのは頼文の影響による部分が大きい。[20] また、伊勢の神宮の外宮周辺で育ったことも、影響しているだろう。[21]

京都帝国大学との関わり

井上頼寿が京都に移住した時期は、京都帝国大学の西田直二郎（一八八六～一九六四）を中心として民俗学を取り入れた新たな文化史学が形作られつつある時期である。[22]

『京都民俗志』の「後記」には天沼俊一（一八七六～一九四七）・喜田貞吉（一八七一～一九三九）といった京都帝国大学に関わった人びとに対する謝辞があり、この交流は頼文のころからのものであるとする。このことから、頼寿と同大学との関わりは、西田直二郎のみを経由したものではない。

そうではあっても、頼寿は同稿において

大正十三年頃は誰も友無く、洛中洛外の囲炉裏の辺に独り故老の話を聞いたものであつたが近年とみに便宜が出来、学会も数多組織され、拾遺会の諸君等は小生の為に非常な力を尽してくれ感謝に堪へない。［中略］京大民俗会を指導してゐられる西田直二郎博士にも一方ならぬ御高配を忝うした[23]

としており、頼寿が京都へ移住してきた当時（大正十三年）から、『京都民俗志』「後記」が執筆される昭和八年（一九三三）八月までに、京都における民俗学の状況が変わったこと。西田直二郎と交流した事などをうかがうことができる。

西田と交流し、同時代に京都での民俗学の活動が活発になっていったことは、この時期の頼寿を考える上でも重要であると考える。

昭和二年（一九二七）、西田直二郎は「古代の文化」を同

大学において講義した。この講義は「民俗学的事例というものを古代史の文化の発展の上に引用」[24]するものであった。この講義を聴講していた肥後和男（一八九九～一九八一）や池田源太（一八九九～一九九五）は民俗談話会をつくる。これが後の京都帝国大学の民俗学会となる。頼寿はこの会において、

- 門飾りに就いて[25]（民俗談話会、昭和四年一月二十七日）
- 唾の話[26]（民俗学研究会、昭和五年十月七日）
- 星降り井と鏡の水[27]（民俗学研究会、昭和六年七月九日）
- 耳の話[28]（民俗学会、昭和十一年一月二十日）
- 鞍馬竹伐り会について[29]（民俗学会、昭和十一年六月十八日）
- 精進塚について[30]（民俗学会、昭和十二年十一月五日）

の発表を行っている。また、井上が日常、持ち歩いていたと考えられる手帳（『蔦葛』（井上頼寿資料））をみると、同会へ参加した際のメモも散見する[31]。さらに、同会で行われた採訪にも参加している[32]。昭和六年（一九三一）三月十五日に行われた民俗学研究会の例会においては、肥後和男の採訪計画（詳細不明）について説明がなされている。この際に、地域ごとに数名ずつの担当が割り振られている。『蔦葛』九六（井上頼寿資料）には、この会に出席した際のメモが残る。そこには「西　乙訓、山崎、大原野　井上、池田、岸本」とある。これは同会の報告を掲載する『史林』の彙報欄に「（西部方面）井上、池田、岸本」[33]とあることと一致する。「井上」は頼寿のことであると考える。

なお、肥後和男は、翌年に東京文理科大学・講師となって京都を離れている。また、この調査計画がどうなったのかは明らかにしえていない。

昭和十年（一九三五）より肥後は、東京文理科大学の学生とともに滋賀県下の宮座調査を進め、同十三年に『近江に於ける宮座の研究[34]（東京文理科大学文科紀要　一六）』、同十六年に『宮座の研究[35]』を刊行している。

頼寿は昭和十五年（一九四〇）に『京都古習志』（館友神職会）を刊行している。

柴田實は、これを肥後の研究に刺激されたものととらえている[36]。しかし、同時代には原田敏明や辻本好孝も祭や宮座の調査を行っている[37]。このことから、頼寿が『京都古習志』を執筆したのは、肥後の影響とするよりは当時の研究動向との関連を視野に入れたほうが良いだろう。

また、この時期に頼寿が研究成果を刊行する背景には、紀元二千六百年（昭和十五年）に頼囦・頼文・頼寿の三代が教育に携わったことによって表彰されたことのほか[38]、昭和十三年に高原美忠が八坂神社宮司となり、著書の刊行を勧めたことも大きい[39]。この点については後述する。

さらに昭和八年より、京都府神職会からの寄付により京都帝国大学では神社並びに神道研究に関わる講義が行われるようになる。ここでは、宮地直一や柳田國男、折口信夫らが講義した[40]。この講義の一部には、頼寿も出席している[41]。

京都を中心とする研究会・神社関係者等との関わり

京都帝国大学に関わるほか、頼寿は江馬務が主催する風俗研究会[42]にも参加している。「矢代田楽に就いて[43]」「相楽神社の祭祀と神楽[44]」のほか、本稿で考察する「八瀬祭を観るの記」などを同会の会誌である『風俗研究』に執筆している。

昭和七年（一九三二）には、薮田嘉一郎らによって作られた土俗同好会[45]の同人ともなっている。その会誌『土俗雑誌　怒佐布玖呂』三に「祇園会に関する一、二の資料[46]」を執筆している。同会の主なメンバーには薮田のほか、江馬務、今井啓一、藪重孝、光島律治らがいた。このメンバーは京都・大阪在住の人びとである。同会は会誌の発行のほか、祭の見学なども行なっていた。会誌の投稿募集欄には内容は「本誌に相応しいものなら何でも結構」として、「各地の特異風俗、祭事、年中行事、俗信、民謡、民踊、童謡、方言、郷土玩具、土産物、神話、伝説、口碑[47]」が挙げられている。

この他、『京都古習志』（館友神職会）の出版は神宮皇學館の卒業生である高畠光明（大阪府・原田神社）や高原美忠（京都府・八坂神社）の尽力による部分が大きい[48]。高原は大正五年に神宮皇學館本科を卒業し、昭和十三年より八坂神社宮司を務めた。『京都古習志』「はしがき」（地人書館）によれば、この出版を促したのは先述の通り、高原である[49]。

頼寿が戦後に滋賀県神社庁の依頼をうけて『近江祭礼風土記』を著し、晩年に、その続編を執筆するのも、神宮皇學館や神社関係者を中心とする人間関係の中でのことであろう。『近江祭礼風土記』の「あとがき」には、平田貫一や高原美忠への謝辞がある[50]。平田は、神宮皇學館の出身ではないが、昭和五年（一九三〇）より十五年まで神宮皇學館館長をつとめ、同年九月からは近江神宮宮司、戦後は滋賀県神社庁長もつとめた。さらに『伊勢信仰と民俗』の執筆を神宮司庁より依頼されるのも、伊勢あるいは神宮皇學館、神社関係者との交流によるものと考える[51]。

戦後、頼寿が京都國學院において教鞭をとるのも、やはり京都府や滋賀県の神社関係者と交流があったためである[52]。このような点から、今後は神宮皇學館の卒業生や近畿地方の神職のネットワーク、それが京都の文化史学の展開の中で果たした役割、さらにその中での頼寿の活動についても考える必要がある。

京都における文化史の展開と井上頼寿

菊地暁は、京都において展開される研究会活動の傾向性として

（一）分野にとらわれない越境的な問題意識
（二）所属にとらわれない開放的な人的交流
（三）成果にとらわれない問題発見的な研究活動

の三点を指摘している。[53] 頼寿は歴史学と民俗学の枠組みにとらわれずに調査を進めた。また、京都帝国大学に属していたわけではないが、同大学や、風俗研究会、あるいはその周辺の民俗学を含めた文化史学の動きと関わりながら活動している。頼寿がこのような活動をし得た背景には、菊地が指摘するような京都の研究会の傾向性があったと考える。

また、このように捉えると、頼寿が民俗学を志したのは父・頼文の影響であるが、その調査・研究を深めることができたのは京都における研究活動や人間関係があったためと考える。よって、頼寿は大学に属さずに単独で調査・研究を行っていたのではなく「京都」という場を中心に様々な人々と関わりながら調査・研究を続けていた人物と位置づけることができる。

二、井上頼寿の研究姿勢

井上の著述形式は、調査結果を踏まえて論を示すよりも事例を資料として列記する手法を取る。その理由については頼寿が「鳥居を探す」において次のように述べている。

「見識」が初めにあつてそれによつて判断を定め、材料を選択するのでは無く、理論を述べてその理論によつて資料を整理し使ひこなす訳でもなく、小生のは本当の「単純」で、たゞ客観的な材料を数多く並べその並べて行く内に個間の「比較」によって自然に抽出すべき本質を資料その物に語らせてみようと云ふのである。［中略］出来る限り理論を避け実証的にやりたい。材料その物を並べ挙げる事のみによつて誰人にも首肯せしめ得たならば自分としては満足だと、勝手にこうきめて兎も角もまあ材料を多く集める事に努力をした。[54]

このように頼寿は、事例の比較を重視し、理論をたてることを避けている。岩田英彬は頼寿自身が「何とか理論のようなことは日本国中の民俗の調査が終ってからのことであって、今はまだそのような時でありません」とも話しておられた[55]」と回想している。

比較を重視するために、事例を記述する際の「材料」についても「洛南随筆（三）（民俗採訪漫記）」において、次の

ように述べる。

民俗上の論文を書く場合に、郷土の事を記した雑誌を見て其の報告を直ちに採つて資料とする事が有るが、これはもつと吟味を経ねばならぬ事でないかと思ふ。［中略］民俗風習でも矢張り実地に其の地へ行つて見て果してその通りの事が行はれてゐるかを現存の出来るだけ多くの老人に聞き、又たとへ江戸末期や明治頃の物でも記録があつたらそれと対校して初めて安心して資料としての使用が出来るのではないかと思はれる。

どんな事項にしても採訪者の経験や注意の置き処乃至は趣味などによつて種々標準に差異が出来るし、尋ねた相手も或程度迄人数を多く採つて客観性を得なければ危険であり不安である。[56]

すなわち、民俗事例についてでも資料批判が重要であるとする。このような伝承と歴史資料の双方を用いて事実を明らかにしようとする姿勢は注目できる。しかし、この点は頼寿の著作が「聞取り内容と文献資料からの引用、自己の体験とが判別しにくい箇所もあ」[57]るとされる原因ともなっていよう。

また、同稿では、珍奇な事例よりもどこにでもある事例を集めて比較するほうが安全であり、「選択よりはむしろ全体を目標としたい」[58]とする。

『京都古習志』（館友神職会）でも、

▽必ず踏査したものを記す事とし、報告は採らぬ事とした。併し帰つてから質問状を出して返事を得た事は多く、記録を後程写して送つて戴いた例もある。

［中略］

▽文章を整へるよりは及ばず乍ら事実を忠実に現はす様努めた。諄々しくともよく、又不備なのが有の儘ならばそれでよいとなしたのである。

［中略］

▽体裁を良くするよりは少しでも資料を多く収める様努めた。[59]［以下略］

として、同様の姿勢をみることができる。この点は、『伊勢信仰と民俗』「あとがき」において、依頼を受けて思い浮かんだのは、全国の伊勢講の調査であるが、それはできず近畿だけでもと思ったが、それもできない。「一県を一ヶ所宛だけでも選んで細かく尋ね伝承を素朴のままに採集してみたいと切望したのであるが」[60]とする点にも現れている。

これらをまとめると、頼寿は歴史資料を用いて確認した民俗事例を、理論を用いずに比較することで本質を示そうとしているといえ、それは資料として事実を列記するという頼寿の手法にあらわれている。

三、「井上頼寿資料」の概要

「井上氏旧蔵資料」は、國學院大學図書館が所蔵する井上頼囶、頼文、頼寿の三代に関わる資料群であり、現在、調査・整理が進められている。

頼囶は昭和二十一年まで國學院大學の母体であった皇典講究所の創設・運営に深く関わった。本資料群は、この御縁により、井上頼輝氏によって寄贈されたものである。[61]

井上頼寿資料は、その一部である。

同資料群の中心をなすのが、『蔦葛』と題される手帳類（一三〇冊）と『京之山』と題されるノート（四三冊）である。このほか、テーマや地域ごとにまとめられたファイル・ノート・手帳・メモ・原稿類が五〇〇点ほど確認されている。

『蔦葛』は、頼寿が日常、持ち歩いていた手帳と考えている。そこには、調査の際に見聞したことだけでなく、京都帝国大学に於ける講義を聴講した際のメモ、研究会の記録、新聞記事の抜書などが記される。

この他にも、頼寿は数多くの手帳やメモを残している。[62]

『京之山』は『蔦葛』をはじめとするメモの清書ほかが記されたノートである。なかには目次やキーワードが付されたものもあり、また「神祇」「神饌」といった一つのテーマに関することをまとめたノートなどもある。

これらの手帳・ノート類には、調査日が明記されているものも多く、調査年月日の特定ができる。特に『蔦葛』『京之山』は、ほぼ年代順に、まとめられている。前者は大正十三年（一九二四）十一月から昭和十一年（一九三六）八月頃まで、後者は大正十三年五月から昭和十一年一月までを確認している。

これらの手帳・ノートをみてゆくと、それぞれの項目に、注として、参照すべきノート・メモ（略称）の巻・頁が記されたものが散見する。これは事例を比較するための着想を示したものであり、頼寿がどのような事例を結びつけて考えようとしたのか理解できる。この点は、頼寿がテーマごとに事例を列記し、比較しながら考えてゆく手法と関わる。

著述との関わりでは、これらのノート・メモ類の文章を整える形で、それを執筆していると思われる箇所がある。

四、井上頼寿の著述と井上頼寿資料

井上頼寿は、昭和二年、風俗研究会の機関誌である『風俗研究』八六号と九一号に「八瀬祭を観るの記」「同（承前）」を発表した。八瀬祭は天満宮社（八瀬天満宮、京都府左京区八瀬）の祭りであり、[63]同稿は、その調査を行った際

の記録である。

「八瀬祭を観るの記」の執筆目的

「八瀬祭を観るの記」は天満宮社の八瀬祭を記録・報告することを目的として執筆された。これは、頼寿が「目撃したまゝを記してみる」[64]とすることからわかる。また、頼寿は『京都古習志』においても天満宮社について触れている。

しかし、ここでは神事を行う「神殿（こうどの）」についての記述が中心であり、祭礼については、

祭礼に於ける神殿の服装は昔からの慣例では松尾の稚児同様黒袍を着用する事になつてゐた。足に『後かがり』をなし伴が朱傘を差かける。乗馬する時には一同警蹕を唱へる。[65]

とするのみである。また地人書館版は、館友神職会版に加筆しているが、祭についての加筆箇所は「御弓や五月の祭（八瀬祭…引用者）にも息子は社参する。祭には帷子を着化粧廻しを締め、しゅすの襷をかけて天鵞絨の脛巾を附け、神殿の先に立つ」[66]とある部分ほかである。

すなわち、頼寿は八瀬祭について調査を行なっていながら、『京都古習志』には、その詳細を記さなかったように見える。大野啓は「『古習志』その後（六）―京都市右京区水尾の場合―」において「『古習志』がいかにすぐれた報告を行なっているとはいえ、その記述のあり方について検討を行なわず、変遷や社会を論じることに問題がないとは言い難い。」[67]として検討を加え、頼寿が『京都古習志』において描こうとしたのは「あくまでも宮座であり、祭礼全体を描こうとしたものではない」[68]とする。このことは大野も引用するように、[69]頼寿自身が「神社を中心とする宮座、及び座と云ふ名称は別に無くとも頭屋が当る様子等が座の形態を思はしめる様な例はつとめて挙げる事とした」[70]「昭和十二年に洛南の居籠祭を拝観して以来、「宮座」或は、別に座と云ふ名称は無くとも形態の似た例を調べた。此はその報告である。」[71]と述べているとおりである。大野の指摘は「八瀬祭を観るの記」と『京都古習志』の記述の差を考える際にも有効である。

すなわち、「八瀬祭を観るの記」は「八瀬祭のビラを見たので同村天満宮へ赴いて、その始終を見た。目撃したまゝを記してみる。」[72]とあるように、八瀬祭について記録・報告することを目的とし、『京都古習志』は「宮座」のような祭祀組織を記すことを目的としている。このため、頼寿は、祭礼そのものについては『京都古習志』において詳述しなかったのであろう。

なお、八瀬祭について、頼寿は『京都民俗志』[73]、「御旅所

考」[74]（『皇学』三―一）、「宮座と神事能」[75]（『芸能史の研究』）においても触れている。特に『京都民俗志』においては、天満宮社の御旅所を「『御旅所』の最も古い形式である」[76]とする。

井上頼寿資料との関わり

頼寿は大正十五年五月九日に八瀬祭の調査を行った。[77]この際の調査の記録は井上頼寿資料のうち、次の手帳・ノートに記される。

- 『蔦葛』一一、（記録期間：大正十五年三月十九日～五月十一日）
- 『京之山　四（主トシテ、神道ニ関スル資料）』（記録期間：大正十四年十月十五日～同十五年六月十五日）
- 『京之山　六（主トシテ、神饌資料）』（記録期間：大正十四年～）

まず『蔦葛』一一は実際に八瀬祭を観た際に採られたメモであると思われる。この記録は「五月九日　八瀬祭」と題が鉛筆で書かれ、所々インクなどでなぞられている。記録の中には剣鉾や競馬の騎手、童女のスケッチなども含まれている。ただし、後述する『京之山』と比較すると、情報が少ない。この他にメモがあったのか、これと記憶とを結び付けて『京之山』をまとめたのかは明らかではない。また、剣鉾についてはスケッチなども記しているが、「八瀬祭を観るの記」では、ほとんど取り上げられていない。

『京之山』四には神道、すなわち祭や神社に関する記録がまとめられ、巻六には神饌に関する記録がまとめられている。

『京之山』四に挙げられた祭りを、目次に従って抄出する。

粟田祭、東天王祭、薬祖神祭、大豊神社牡丹鉾ノ飾、白川天神祭三之鉾飾、粟田祭（降リ鉾）、平野神社桜祭、今宮神社やすらゐ祭、稲荷社神幸祭、上御リョウ（霊）社神幸祭道順、湯立（稲荷御旅）、今宮神社御旅、八瀬祭、宇治神社（祭）、宇治上神社例祭、三条大将軍社祭、恵比須神社祭、梛神社祭、下御リョウ（霊）祭、葵祭下賀茂神社庭上儀

これらには、それぞれ小項目が付けられている。そのいくつかを挙げると、

粟田祭（幣、三条小鍛冶劔、提灯ジューニン、鉾飾、紋、露店）
東天王祭（鉾飾、犬鷹鉾）
［中略］
白川天神祭三之鉾飾（箸、豆腐、練酒、鉢巻ノ飯）
［中略］
今宮神社やすらゐ祭（幣、花笠、よたれ（花棒）、送順、

あぶり餅）

である。「八瀬祭」の小項目は、

童女、童男、神饌、祭ノ着物、御輿飾リ（草花）、馬ノ鞭、願ノ馬、冠、まはし、警蹕、神職走ル事、頭ハリアヒ、神楽、賽銭、酒、歌ノ神移シ、花鉾、御旅神饌、大夫翁ノ謡、笏フリ、かんじょう（縄）

である。

記録は見聞した順に記されている。本文にはほぼ考察を交えず、最後に「【注意点】」「●祇園祭ト似タル点」の項目を立てて、他の祭礼と比較している。また、欄外には「今宮祭ト祇園祭」と記されたり、脚注に参照項目として他の祭礼の記録が挙げられていたりする。この注から、頼寿がどの祭礼との共通点を考えていたかがわかる。

『京之山』六は神饌に関する資料がまとめられたノートである。ここには、出世稲荷（初午）、今宮やすらゐ花、宇治上神社例祭、元祇園梛神社例祭、八瀬天満宮祭神饌、市比売神社祭、恵比須神社飾鉾、春日若宮祭・神饌・ぶと、などの事例が収められている。

このうち「八瀬天満宮祭神饌（五月九日）」には、粽や餅の絵や神饌の配膳図、或いはそれに関わる説明などが記されている。

『京之山』四、六との一致

「八瀬祭を観るの記」は、頼寿が見聞した順、すなわち行事の行われた順に記される。以下、『京之山』四、六と「八瀬祭を観るの記」を部分的に比較する。

例1

「八瀬祭を観るの記」

社前に着いたのが午前十一時頃で、丁度朝供へた神饌の撤下を童女四人（七八歳、額と両頬に紅を点じてゐる）に娘三人許附き添ひ、村へ降つて来るところであつた。神饌は粽や餅で、鳥羽僧正の鳥獣戯画絵巻に狐か何かが食物を運んでゐる状の様に、曲物に入れ頭にのせて石段を降る。但し童女は唯形式的に歩くだけで曲物は両方より男が頭の上へ捧げ持ち乍ら附いて行く。(78)

『京之山』四

童女四人（額ト頬ニ紅ツク七八歳）。娘（十五六）三人許。（以上頭ニ手拭シ、ソノ上ヘ藁巻キシモノセタリ。神饌ヲ入レタル曲物ヲ頭ニ舁グナリ）［中略］午前ニソナヘシ神饌ヲ曲物ニ入レ、午前十一時頃村へ戻ル。（御下リヲ村へ持チ行クナリ、娘ハ頭ヘカツギ、子供ハ唯歩キ横ヨリ白丁二人サヽゲ行ク。中ニハ御下リノ粽餅等入ル）。

※脚注に「六、P12」とある。

※この次のページに、図1のような童女の図が有り、また注として曲物を舁く姿が『鳥獣人物戯画』に見えることを記している。

例2

「八瀬祭を観るの記」

儀式［神輿への神移し…引用者］が畢ると其内の一人（中年）が立つて『皆駕輿丁衆参らしやつたかいのう』と唄ふ様に云ふ。その詞の畢るや否や皆御輿の傍へ走り寄つて之を舁ぎ上げ『さんよれ〳〵』とて勇ましく大騒をする。（駕輿丁は皆扇持ち、又帯の後の方へ日本紙を細く折つて挿んでゐる。怪我でもした折直ぐ指等括る用意であるとの事。中には印籠を下げたのもある）[79]

『京之山』四

移シガスムトスグソノ内ノ一人立チテ〈中年〉「ミナ

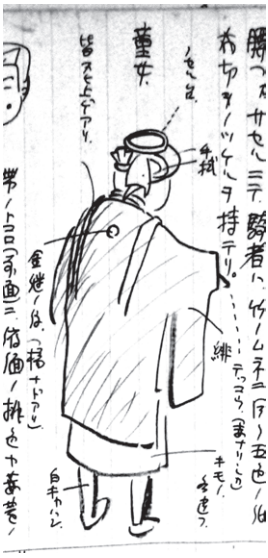

図1　童女（『京之山』4）

カヨチョウシュウーマイラシャッタカイノー」ト歌フヤウニ云フ。時ヲ移サズ皆御輿ノ元ヘ走リ行キテカツギ上ゲサンヨレ〳〵トテ大騒ギス。勇シ。

（与丁ハ腰ヘ［日本紙の図省略…引用者］日本紙ヲ折リテハサメリ。帯ノ後、怪我シタルトキ指ナドククル用意ナリト。又印籠下ゲタルアリ。）（又皆扇持テリ）

※脚注に「蔦（十九）P．30 P．39」とある。

例3

「八瀬祭を観るの記（承前）」

其時鉦打つ。それを合図に蹲踞してゐた駕輿丁衆一斉に立ち上り、神輿を舁いで「さんよれ」と高声に騒ぐ。次に行列を作つて御旅へ発す。剣鉾三本先行、次に躑躅や桂を附した花鉾一本、神輿二基石段を降る。神職、走り降つて乗馬し之に随ふ。多勢之に従ふ。

童女、娘、まげ物かつぎて御旅へ先へ行き居り騎者又これより先御旅へ行き、別道から本社に還る。[80]

『京之山』四

ソノ時　鉦打ツ。ソレヲ合図ニカヾマリ居シ与丁一斉ニ立チ上リ御輿ヲカツギテ「サンヨレ〳〵」トテ騒グ。鉾三本先ヘ行ク。つつじ、桂（あじさいモアリシカ）ヲク、レル花鉾ヲ先ニ立テ、、御輿二基石段ヲ真直ニ降

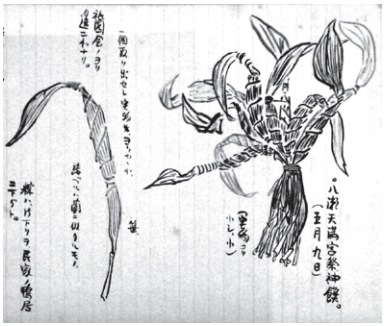

図２　八瀬祭・粽（『京之山』6）

ル。神職馬ノトコロヘ走リ降リ、之ニ乗ル。御輿ノ後ヘ白丁ツキ行ク。高野川ヲ渡リ御旅ヘ行ク。

童女娘モ曲物カツギテ供ス。先ヘ御旅ヘ行ク。コレヨリ先騎者馬ニ乗リテ御旅ヘ行キ、別道ニテ本社ノ方ヘカヘル。

※脚注に「今宮花棒」とある。

例4

此祭に於て一寸気の附いた事を二三ノートから抄出する。

○八瀬村では長い形の提灯（天満宮と書す）を出し、軒口に縄張り、竹と榊にシデあるを之に附する。幕を張った家を見受けなかつた。

○幣の多いのが特徴。幣を各社の前方柱の下部へ立てかけるが、故老安川氏の談によると、其の基数は本社六本、山王、八王子及御旅が六本宛が古例で、本社を十一本にする事もあると。[81]

『京之山』四

幣ヲ社ノ下ノ処ヘ立テカクルガ故老安川ノ云フ処ニヨレバ、本社六本、岩上神社六本、山王八王子六本。及ビ御旅ガ六本ナリト。（本社十一本御旅六本トモ云ヘリ）

［中略］

八瀬村ニテ［提灯の図を省略…引用者］長キ提灯出ス。天満宮トアリ。［星梅鉢の紋を省略…引用者］家ノ姓ヲ書ケリ。幕ハレル家ミズ、軒バニ縄ハリ竹ト榊ニシデアルヲ之ニ附セリ

民家ノ柱ニ幣附セルアリ。

此ノ祭ニハ幣多キガ特徴ナリ。

例5

「八瀬祭を観るの記」

粽は笹葉で、後鴨居に掲けるそうであるが、祇園祭のより遥かに小さく、実は一寸位。[82]

『京之山』六

同ノートには、八瀬祭の粽の図が、原寸より少し小さめに描かれており（図2）、これに注を付して、「祇園会ノヨリ遥ニ小ナリ。」「粽ハ御下リヲ民家ノ鴨居ニ下グト」とある。

まず、「此祭に於て一寸気の附いた事を二三ノートから抄出する。」[83]（例4）とあり、それが『京之山』四と一致することから考えれば、「ノート」とはこの『京之山』四を指すと考えられる。

さらに、それぞれを比較すると、文章がよく似ており、『京之山』四、六の文章を整える形で「八瀬祭を観るの記」を執筆していると考える。他の部分においても同様である。

また、『京之山』六に描かれた粽のスケッチ（図2）は、「八瀬祭を観るの記（承前）」の挿絵と酷似している。[84]

このことから、「気の附いた事」のみでなく「八瀬祭を観るの記」全体が、『京之山』をもとにしているといえる。

このような点は、『京都古習志』の一部についても言え、[85]今後は他の著述についても明らかにしてゆきたい。

他の祭礼との比較

頼寿の方法として、比較があることは先述のとおりである。「八瀬祭を観るの記」では、他の祭礼との比較については、ほとんど記していない。

例1の脚注に付された「六、P12」は『京之山』六の一二頁、例2の「蔦（十九）P.30 P.39」は『蔦葛』一九、三〇頁・三九頁を指す。前者は『京之山』六「八瀬天満宮祭神饌（五月九日）」であり、後者は『蔦葛』一九の木津太鼓祭（岡田国神社・御霊神社〈京都府〉）について記した箇所である。例3の「今宮花棒」は今宮神社やすらい花で用いられる青竹を幣串とする御幣に花（桜と椿）を添えた「よたれ」のことである。[86]頼寿は、鉾に花が括ってある事例を観て、御幣に花をくくる今宮神社の「花棒」を連想したのであろう。

比較は祇園祭の粽とのものだけであり、[87]木津太鼓祭や今宮神社やすらい花との共通点について、頼寿は「八瀬祭を観るの記」においては述べていない。神饌の「七色に就いては別に述べるつもり」[88]とあるのは、祭礼の比較はこの稿の主題ではないと判断したためと考えられる。

これらの注が、いつの段階で記されたものか不明であるが、頼寿はノートから文章を整える際に考察を記さなかったといえる。これは本稿が八瀬祭について記録・報告することを目的とすることによるであろう。

この他、『京之山』四には

◎祇園祭ト似タル点

- 鉾出ル事　・山王八王子社ト云フアルコト
- 比叡山ト両社トモ関係アリシ事
- 秋元大明神ノ戸帳ニ木瓜ノ紋アリ。

・祇園古図ニヨリ摂社ヲ比較シ古儀ヲ考フベキナリ。
比叡山ニ八瀬ノ天神ノ文書アリト云フ。
・粽ヲ貰ヒ来テ鴨居ニカクル点。

として、祇園祭との共通点を挙げている。ここでは、鉾が出ること、比叡山と関係があること、胡瓜の紋があること、摂社を比較する必要が有ること、粽をかけることなどが列記されている。頼寿は、どうやら天満宮社の八瀬祭と八坂神社の祇園祭との共通点の背景に、両社が比叡山と関わることを考えていたようである。

また、『蔦葛』一九には、「木津太鼓祭」「淀祭」（輿杼神社祭）ほかがまとめられている。「木津太鼓祭」には「八瀬祭」との比較が見える。頼寿が「木津太鼓祭」を調査したのは、同手帳から大正十五年十月二十一日であると推定できる。

「木津太鼓祭」（岡田国神社）
◎八瀬祭ト似タル点《京（四）58　蔦（十一）》
・［星梅鉢の紋を省略…引用者］ノ紋ノアルコト。
（祭神調ブベシ）
・巫女（老女）アルコト。
（八瀬ハ鈴、コレハ幣）
・幣ノ束ヲ神社ノ左右ヘタテカケル事。
・七味（七色）
・一定ノ建築ニテ有力者ノミ酒宴ス
《八瀬祭ノ七色（ナナイロ）ハ山手芋、ところ、茗荷、青苔、蕨、葉竹ノ竹ノ子、ちさの葉（コレニテ包入リ）》

「京（四）58」は『京之山』四、五八ページを示し、先述の「八瀬祭」の記録が記された部分である。

ここでは、木津太鼓祭と八瀬祭との共通点として、紋、巫女、七味（七色）、有力者のみの酒宴、を見いだしている。有力者のみの酒宴の共通点に気付いたことは、のちの「宮座」研究へ結びついてゆくのであろうか。

『京都古習志』においても、天満宮社と岡田国神社・御霊神社の双方の事例が挙げられている。「七色」は岡田国神社では「七味（シチミ）」「七味のおんじき」と称される。頼寿は『蔦葛』一九に「七味トハ、くるみ、なし、ざくろ、かや、栗、なつめヲ一包トシ、別ニ柿ハかわらけニノセル。」「かや、かち栗等ヲ「七味のおんじき」ト称ス」と記録している。[89] 木津太鼓祭を頼寿が調査したのは、先述の通り、大正十五年十月二十一日のことであるので、「八瀬祭を観るの記」執筆段階で「七味」の共通点には気付いていたものと推定される。このため、「七色に就いては別に述べるつもり」[90]としたのであろう。

頼寿は、見識や理論よりも比較を重視したが、ノートに於いてもそのような姿勢を見出すことができる。

おわりに

井上頼寿は、伊勢に生まれ、父・頼文の影響で民俗学に関心を持ち、大正十三年に京都に移住して後は、京都を中心に活躍した。

京都では、京都帝国大学における文化史の動きや、京都を中心に活動していたいくつかの研究会、あるいは出身校である神宮皇學館、及びそれに関連する神社関係者間の交流の中で研究・発表をおこなっている。

頼寿の研究姿勢は、資料として事実を並べ、その比較の中に、「本質」を見出そうとするものであった。著述においても事実を忠実に示すことに留意しており、代表的な著作である『京都民俗志』『京都古習志』『近江祭礼風土記』にもその姿勢は見いだせる。さらに、現地調査を重視し、雑誌に掲載される調査結果は吟味して用いるべきであるとした。

國學院大學図書館所蔵井上氏旧蔵資料の中にある井上頼寿の研究資料は、『京之山』『蔦葛』を中心として、頼寿の著作との関係が見出されるものもある。

頼寿が『風俗研究』八六・九一号に執筆した「八瀬祭を観るの記」は『京之山』四・六にもとづいていた。ノート・手帳を見ると、参照項目を記して、比較を行なっていたことがわかる。このことは「「比較」によって自然に抽出すべき本質を資料その物に語らせてみよう」[91]と関連する。

井上頼寿については、今後、神宮皇學館、神社関係者との関わり、あるいは京都における民俗学を含んだ文化史の発展との関わりの視点から再評価する必要がある。それは民俗学の展開のみでなく、祭祀・祭祀組織研究の展開とも関わる。

井上頼寿について明らかにするためには、著述の分析と同時に、井上頼寿資料の調査・分析を進めることが必要になると考える。

註

(1) 井上頼寿「八瀬祭を観るの記」(『風俗研究』八六、一九二七年)、「同(承前)」(『風俗研究』九一、一九二七年)。本稿では両者を「八瀬祭を観るの記」と表記する。ただし、出典を記す場合などはそれぞれを区別する。

(2) 『京都民俗』には、「『古習志』その後」(一~六)という連載がなされている(注5参照)。これは、『京都古習志』に記された事例と現在の事例を比較したものである。本稿は、國學院大學図書館所蔵井上氏旧蔵資料のうちに含まれる井上頼寿の研究資料と著作とを比較することにより、執筆以前を考えたい。

(3) 井上頼寿『京都古習志』「宮座(凡例)」(館友神職会、一九四〇年)。

(4) 井上頼寿「鳥居を探す」(『館友』三三六、神宮皇學館々友会、一九三六年)二四頁。

(5) 村上忠喜「『古習志』その後(一)」(『京都民俗』四、一九八六年)、岩坂七雄「同(二)」(『京都民俗』五、一九八七年)、中村彰「同(三)—京都府久世郡久世御山町・玉田神社の宮座」(『京都民俗』六、一九八八年)、政岡伸洋「同(四)—京都市左京区花背別所のミヤザシキ—」(『京都民俗』八、一九九〇年)、橋本章「同(五)—滋賀県草津市下笠町のオトナ組織—」(『京都民俗』一三、一九九五年)、大野啓「同(六)—京都市右京区水尾の場合—」(『京都民俗』一九、二〇〇一年)。

(6) 関谷龍子「井上頼寿」(福田アジオほか編『日本民俗大辞典』吉川弘文館、一九九九年)。

(7) 櫻井治男「井上頼寿—篤実な民俗採訪者—」(『皇學館百二十周年記念誌—群像と回顧・展望—』皇學館、二〇〇二年)。

(8) 岩田英彬「井上頼寿先生のこと—歩く民俗学—」(『近畿民俗』一七五・一七六、二〇〇八年)。

(9) 拙稿「國學院大學図書館所蔵「井上氏旧蔵資料」からみた井上頼寿」(『【京都民俗学会三十周年記念シンポジウム】「野」の学問百年　京都編　田中緑紅・井上頼寿・江馬務、そして…—京都における民俗学の萌芽期に問う—」『京都民俗』二九、二〇一二年)

(10) 櫻井治男「人物コラム⑥　井上頼寿」(三重県編『三重県史　別編・民俗』三重県、二〇一二年)。

(11) 中野卓編・著『中学生のみた昭和十年代』(新曜社、一九八九年)。

(12) 櫻井治男「人物コラム⑥　井上頼寿」四八八頁。

(13) 柴田實「京都府」(『日本民俗学大系　一一　地方別調査研究』平凡社、一九五八年)。

(14) この他、当時の京都の動きをまとめたものとして、蘇理剛志「京都帝国大学民俗学会について—関西民俗学の黎明—」(『京都民俗』一九、二〇〇一年)、菊地暁「主な登場人物—京都で柳田国男と民俗学を考えてみる—」(『柳田国男研究論集』四、二〇〇五年)、菊地暁「京大国史の「民俗学」時代—西田直二郎、その〈文化史学〉の魅力と無力—」(『近代京都研究』思文閣出版、二〇〇八年)ほかがある。本稿で述べる京都における民俗学の動向については、これらを参照した。

(15) 櫻井治男「井上頼寿—篤実な民俗採訪者—」三八三頁。

(16) 拾遺会については中野卓編・著『中学生のみた昭和十年代』に詳しい回想がある。

(17) 本稿では、以下、特に断らない限り、『京都民俗志』と記した場合、西濃印刷株式会社岐阜支店版を指すものとする。

(18) 井上頼寿『京都民俗志』「後記」。

(19) 井上頼寿「先考井上頼文の事ども」(『国漢』九号、一九三二年)一三八頁。井上頼寿「井上頼文著述草稿目録」(『館友』二八九、一九三二年)五一頁。

(20) 櫻井治男「井上頼寿—篤実な民俗採訪者—」三八三頁。

(21) 井上頼寿『伊勢信仰と民俗』二七〇頁。

(22) 京都帝国大学における民俗学と神道研究との関わりについては、拙稿「近現代神道史の一齣—忘れられた神道研究—」(前編、後編)(『神社新報』三二六三・三二六四号、

二〇一五年六月八日付、同一五日付）で述べた。

(23) 『京都民俗志』「後記」。

(24) 柴田實「京都の民俗学事始め」（『京都民俗』創刊号、一九八四年）四頁。

(25) 『史林』一四―二「彙報」（一九二九年）一五九頁。

(26) 『史林』一六―一「彙報」（一九三一年）一六五頁。会の名称はこれに依拠した。

(27) 『史林』一六―四「彙報」（一九三一年）一七七頁。

(28) 『史林』二一―二「彙報」（一九三六年）二一五頁。

(29) 『史林』二二―一「彙報」（一九三七年）二三一頁。

(30) 『史林』二三―一「彙報」（一九三八年）二〇〇頁。

(31) 『蔦葛』八三、九一、九四、九六、九七（井上頼寿資料）など。

(32) 昭和十年十二月十五日、井上頼寿は学生三名と葛野郡小野郷村真弓・大野を調査している（『史林』二一―二「彙報」、一九三六年）二一五頁。この際の記録は井上頼寿資料『小野郷（蔦葛：一三六）』にみえ、「同行　平山外二名」とある。この平山は平山敏治郎であろうか。

(33) 『史林』一六―四「彙報」（一九三一年）一七五頁。

(34) 肥後和男『近江に於ける宮座の研究（東京文理科大学文科紀要　一六）』（東京文理科大学、一九三八年）。

(35) 肥後和男『宮座の研究』（弘文堂書房、一九四一年）。

(36) 柴田實「京都府」一八九～一九〇頁。

(37) 大正八年に神宮皇學館を卒業した原田敏明は昭和十一年より、宇野円空・古野清人らと有栖川宮記念奨学金を「本邦農耕儀礼の宗教民族学的研究」によって受け、調査を行なっている（原田敏明『宗教　神　祭』岩田書院、二〇〇四年）所収「原田敏明略年譜」。また辻本好孝は昭和十三年より雑誌『磯城』（磯城郡郷土文化研究会）に「磯城郡の古典行事と奇習」の連載を始める。これは後に『和州祭礼記』（天理時報社、一九四四年）としてまとめられる。辻本については杉本悦子『父のペン胼胝』（私家版、二〇〇一年）を参照した。

(38) 井上頼寿『京都古習志』「はしがき」（地人書館）一頁。

(39) 井上頼寿『京都古習志』「はしがき」（地人書館）一頁。

(40) 宮地直一（日本神祇史（神祇史）、昭和八～十四、十六、十八年）、原田敏明（日本古代宗教、昭和九年）、柳田國男（民間の信仰、昭和九年）、出雲路通次郎（神道有職故実、昭和十年）、柳田國男（民間信仰と慣習、昭和十二年）、折口信夫（神道と民間信仰、昭和十四年）などの講義が行われた（『史林』「彙報」に依拠した）。

(41) 『蔦葛』一一四（井上頼寿資料）をみると、昭和九年十月二十二～三十日に柳田國男が京都帝国大学で行った講義の記録がみえる（『民俗学講義（秋季）「民俗学講義」柳田氏「祭」ノ概説』）。この年の柳田の講義については、柴田實「京大と柳田先生」（『定本　柳田國男集　月報』七、筑摩書房、一九六二年）を参照した。

(42) 江馬務については、『江馬務著作集』別巻「年譜」（中央公論社、一九八二年）、新木直安「江馬務の歳事史研究と京都の祭礼―歴史を可視像化した有職故実家」（『國學院大學伝統文化リサーチセンター研究紀要』三、二〇〇一年）などを参照した。

(43) 井上頼寿「矢代田楽に就いて」（『風俗研究』二三九、一九四二年）。

(44) 井上頼寿「相楽神社の祭祀と神楽」(『風俗研究』二四一、一九四二年)。

(45) 土俗同好会については同会の会誌『土俗雑誌　怒佐布玖呂』及び土居浩「三つ子に鮒鮨―昭和七年・京都における民俗学／土俗学について―」(『柳田国男研究論集』四、二〇〇五年)などを参照した。

(46) 井上頼寿「祇園会に関する一、二の資料」(『土俗雑誌　怒佐布玖呂』三、一九三二年)。

(47) 『土俗雑誌　怒佐布玖呂』二(一九三二年)。

(48) 井上頼寿『京都古習志』「はしがき」(館友神職会、地人書館)。

(49) 井上頼寿『京都古習志』「はしがき」(地人書館)。

(50) 井上頼寿『近江祭礼風土記』「あとがき」。

(51) 頼寿と伊勢及び神宮皇學館との関係については、櫻井治男「井上頼寿―篤実な民俗採訪者―」(三八四頁)を参照した。櫻井は『伊勢信仰と民俗』の序文を佐佐木行忠(神宮大宮司)が執筆したのはこれによるものとする。

なお、管見にふれた頼寿の著述を通覧すると、神宮皇學館学友会の発行する『勢友学報』、神宮皇學館々友会の『館友』、神宮司庁が発行する雑誌である『瑞垣』といった神宮皇學館や伊勢に関わる雑誌への寄稿が散見する。これは、頼寿の人間関係の反映とも捉えられる。ただし、頼寿のすべての著作は把握できていない。今後、頼寿の著作を見出しつつ、再検討したい。

(52) 櫻井治男「人物コラム⑥　井上頼寿」四八八頁。

(53) 菊地暁「主な登場人物―京都で柳田国男と民俗学を考えてみる―」二九頁。

(54) 井上頼寿「鳥居を探す」二三～二四頁。

(55) 岩田英彬「井上頼寿先生のこと―歩く民俗学―」四頁。

(56) 井上頼寿「洛南随筆(三)(民俗採訪漫記)」(『上方』七五、一九三七年)三七頁。

(57) 櫻井治男「人物コラム⑥　井上頼寿」四八八頁。

(58) 井上頼寿「洛南随筆(三)(民俗採訪漫記)」三八頁。

(59) 井上頼寿『京都古習志』「宮座」凡例(館友神職会)。

(60) 井上頼寿『伊勢信仰と民俗』(神宮司廳教導部、昭和三十年)二七〇頁。

(61) 古山悟由「明治期国学院の重鎮　井上頼圀　貴重な資料を一括寄贈　研究開発推進機構に花添える」(『國學院大學学報』五四七号、二〇〇七年)。『國學院の学術資産に見るモノと心』「井上氏旧蔵資料」(國學院大學伝統文化リサーチセンター編集・刊行、二〇一一年)。

(62) 岩田英彬は「井上頼寿先生のこと―歩く民俗学―」において、「通された書斎は床の間といわず本棚といわず、メモの山であったのが印象的であった。広告の裏まで使ったメモを含め、採訪の結果はメモに書き取り、改めてノートに清書されるわけである」(二頁)とする。この『蔦葛』がメモにあたり、『京の山』が清書(ノート)にあたると考える。

(63) 八瀬祭については池田昭『天皇制と八瀬童子　歴史と文化』(思文閣出版、二〇〇七年)『剣鉾のまつり』「八瀬天満宮社の例祭」(京都市文化財ブックス第二九集、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課編集、発行、二〇一五年)を参照した。祭礼は未見である。

(64) 井上頼寿「八瀬祭を観るの記」一〇～一一頁。
(65) 井上頼寿『京都古習志』（館友神職会）二一七頁。
(66) 井上頼寿『京都古習志』（地人書館）二〇四頁。
(67) 大野啓「『古習志』その後（六）―京都市右京区水尾の場合―」一九頁。
(68) 大野啓「『古習志』その後（六）―京都市右京区水尾の場合―」二四頁。
(69) 大野啓「『古習志』その後（六）―京都市右京区水尾の場合―」二七頁・注八。
(70) 井上頼寿『京都古習志』「宮座」凡例（館友神職会）。
(71) 井上頼寿『京都古習志』「宮座」凡例（地人書館）。なお、頼寿は『京都民俗志』において祝園村・棚倉村（ともに京都府相楽郡）「居籠の神事」についてとりあげ、「昭和四年以後数年の間にわたり親しく両村の神事を参拝し目撃調査する機を得」（四九九頁）「大正十三年に行った時老人に聞いた事を…」（四九九～五〇〇頁）などとしている。井上頼寿資料のうちにも『京之山』六（大正十四年頃）に相楽社についての記録、昭和四・五年に居籠祭の調査を行った際の記録がある（『蔦葛』五五～五八）。この点から、「昭和十二年に洛南の居籠祭を拝観して以来」とするのは初めて拝観したという意味ではないだろう。
(72) 井上頼寿「八瀬祭を観るの記」一〇～一一頁。
(73) 井上頼寿『京都民俗志』「八瀬天神御供石」一四〇頁。
(74) 井上頼寿「御旅所考」（『皇学』三―一、一九三五年）四〇頁。
(75) 井上頼寿「宮座と神事能」（江馬務編『芸能史の研究』星野書店、一九四三年）七〇頁。
(76) 井上頼寿『京都民俗志』「八瀬天神御供石」一四〇頁。
(77) 井上自身が「八瀬祭を観るの記」において「昨年五月九日比叡山に遊ぼうと…」（一〇頁）として、調査年月日を記している。
(78) 井上頼寿「八瀬祭を観るの記」一一頁。
(79) 井上頼寿「八瀬祭を観るの記」一三頁。
(80) 井上頼寿「八瀬祭を観るの記（承前）」二一頁。
(81) 井上頼寿「八瀬祭を観るの記（承前）」二二頁。
(82) 井上頼寿「八瀬祭を観るの記（承前）」二三頁。
(83) 井上頼寿「八瀬祭を観るの記（承前）」二二頁。
(84) 井上頼寿「八瀬祭を観るの記（承前）」二三頁。
(85) 『京都古習志』と井上氏旧蔵資料との関係は、國學院大學研究開発推進機構伝統文化リサーチセンター平成二十三年度・第四回「國學院の学術資産に見るモノと心」定例研究会で報告した（大東「井上頼寿ノート（井上氏旧蔵資料）調査報告―『京都古習志』「伊勢講」「御弓（御弓講）」の記述にふれながら―」（http://www.kokugakuin.ac.jp/oard/orc-activities_3g_h22_koushi04.html）。
(86) 『京之山』四に依拠した。
(87) 粽が「祇園祭のより小さく」（「八瀬祭りを観るの記（承前）」二三頁）。
(88) 「八瀬祭りを観るの記（承前）」二三頁。
(89) 岩井宏美・日和祐樹『神饌』「岡田国神社・秋祭り」（同朋舎出版、一九八一年）一八〇頁には、「二十一日が岡田国神社の祭礼で、午前七時に当屋は鏡餅を藁で縛った

御供一対と神酒・御幣一対・ワジメ一対を供えるが、その際、くるみ・栗・なつめ・ザクロ・柿・榧の実を紙に包んで一対供える。これら種々のものを「万味の御食」と称している。」とある。頼寿自身は『京菓子』のなかで岡田国神社の神饌について触れ、「祭り時の「一老」（年長者）の献上物は、餅、豊岡の柿と百味ノ飲食（おんじき）（胡桃、栗、かや、なつめ、梨、ざくろ等）とである。」（四五頁）とする。

(90) 「八瀬祭りを観るの記（承前）」二三頁。

(91) 井上頼寿「鳥居を探す」二三頁。

【付記】

本稿は、平成二十三年十二月十八日に行なわれた京都民俗学会三〇周年記念シンポジウム「「野」の学問一〇〇年　京都編　田中緑紅・井上頼寿・江馬務、そして……京都における民俗学の萌芽期に問う―」において行なった発表（「國學院大學図書館所蔵「井上氏旧蔵資料」からみた井上頼寿」）をもとにしている。これは平成十九年より同二十四年まで國學院大學において進めていた文部科学省オープンリサーチセンター整備事業「モノと心に学ぶ伝統の知恵と実践」の研究成果の一部であった。発表及び、その要旨（『京都民俗』二九号掲載）に対し、ご教示をくださった方々に末筆ながら御礼申し上げる。

（國學院大學研究開発推進機構准教授）